健常者と障害者の「カベ」

高　二

私は車いすユーザーである。日頃、車いすの人と健常者には「カベ」があるなと感じることがある。長年、車いすに乗っているので、普通のことだと思っているが、町中で不思議そうに見られることがある。休日に外に出かけることが多いのだが、外に出ていると小さな子供にじろじろ見られることがよくある。車いすの大変さをよく知らないので興味深いのかな、と推測したが、大人にじろじろ見られると、ある程度福祉のことを学んでいるはずなのに、なぜそのような視線を向けるのかとイライラしてしまう。「車いすで外に出てはいけないのか。」と悲観的に思ってしまう。このように、周囲からは珍しいと思われるかもしれないが、当人としてはいたって普通なのだ。

みなさんは自転車に乗る機会はあるだろうか。遊びに行くときや通勤、通学で利用することが多いのではないだろうか。自転車が移動手段の一つであるように、車いすも障害者のための移動手段の一つなのである。また、健常者は歩くことができる。一方、私のような車いすユーザーは歩くことが難しいのだ。しかし、車いすに乗れば基本的にどこへでも行ける。私にとっては、タイヤが足なのだ。これらを踏まえると、車いすは障害者の足代わりとも言えるので、車いすに乗っていることはおかしいことではないのだ。

みなさんはパラスポーツをご存じだろうか。車いすラグビーやボッチャなどがある。パラスポーツの中には障害のある人もない人も一緒にできる競技がある。その一つとして「車いすバスケットボール」がある。私自身もサークルに参加していて、障害のない私の母も一緒に楽しんでいる。日本のプロチームにも障害のない人が加入し、障害のある人とともに試合に出場している。このように障害のない人が障害のある人と同じ目線になり、障害者だから成せる技術があることや、障害者の生活で大変な場面があることを知ってもらうと、健常者との「カベ」はなくなると思う。いや、そもそも「健常者」と「障害者」という区別自体が「カベ」なのかもしれない。「健常者」という言葉にも引っかかるところがある。なぜならば、障害

のない人が毎日健康という訳ではないからだ。どんな人でも風邪を引くことはあるはずだ。それでは常に健康とはいえないだろう。だから例えば、「障害のある人」と「障害のない人」と改めてみてはどうだろうか。

これまで書いてきたように、車いすユーザーは不思議な視線を浴びながら生活しているが、車いすに乗っていることは決しておかしいことではなく、足の代わりとして車いすを利用しているだけなのだ。また、「障害のない人」が車いすの視点を体験することも大切だと私は思っている。パラスポーツで「障害のある人」とともに汗を流すことで、これまでになかったコミュニケーションが取れたり、絆が生まれたりするかもしれない。そうすれば偏見という名の「カベ」は無くなるのでは、と私は思う。